

Shkodra 地方のアルバニア語話者の 表現に見られる統語上の特徴

井 浦 伊知郎

0. 序

0. 1. アルバニア語の北部方言とその統語的特徴

アルバニア語には北部と南部で二つの大きな方言グループがある。北部方言はゲグ (gegërishtja)、南部方言はトスク (toskërishtja) と呼ばれる。方言における標準語との差異として顕著なものは、その多くが語彙単位での音韻・形態上の相違である (Gjinari 1989) ¹が、統語上の相違もいくつか存在することが知られている (Buchholz / Fiedler 1987 他)。以下の考察で重要なのは、次の二つである。

①現代アルバニア語では (他のバルカン諸言語と同様) 不定詞形が消失しており、分詞を用いて「二次的不定詞」とでも言うべき表現が用いられる。

例えば *shkoj* 「行く」の分詞は標準語で *shkuar*、北部方言で *shkue* であるが、これを用いて「行くため」などを意味する句は次のように作られる；

(標準語) *për të shkuar*
for (particle) go-participle
(北部方言) *me shkue*
with/by go-participle

②単純未来をあらわす表現は、標準語では (これもギリシア語やブルガリア語など他のバルカン諸言語と同様) 「*dua* 欲する」動詞²が短縮された形 *do* を助動詞として、これに動詞接続法が続くことで作られる。しかし北部方言 (及び南部方言の一部) では「*kam* 持つ」と二次的不定詞の組み合わせで未来をあらわす³；

(標準語) *do të shkoj*
will (particle) go-subj.sg.1
(北部方言) *kam me shkue*
have-sg.1 with/by go-participle

ともに「私は行く (ことになる) だろう」

③「～しながら」などを意味するジェルンドの用法は、分詞とともに用いられる助詞が、方言と標準語とで著しく異なっている；

(標準語) duke shkuar

(北部方言) tue shkue (または tu / tuj shkue)

0. 2. 本論文の目的

ところで北部方言の範囲は、現在のコソヴォのほぼ全域、モンテネグロ南東部、またこれらと国境を接するアルバニア北部から、アルバニアの首都ティラナ附近にまで及ぶ⁴。むろんこの地域全体を対象とした研究は膨大なものになるが、例えば個々の地域に見られる微妙な差異を扱う時、いくつかの新しい課題があるのではないかと考えられる。

例えば、上にあげた統語上の特徴は個々の方言地域で実際に（特に話し言葉に）どの程度用いられているか、という点が一つ。もう一つは、標準語との接触が不断に起こっている現実の会話の場で、それらの特徴がどの程度維持までされているのか、という点である。

そこで本論文では、アルバニア北部の都市シュコドラ Shkodra⁵で2000年9月から10月にかけて得られた二種類の会話テキスト⁶を用いて、上述の観点から検証を行った。一つはシュコドラ出身・在住のアルバニア人家庭内でほぼ自然に（つまり標準語話者の干渉を受けずに）やりとりされている会話⁷、もう一つはこの家族に標準アルバニア語の話者が取材質問し、答えを求めているやりとりである（さらに詳しくは註6を参照されたい）。

1. 方言話者同士の会話テキスト

まず、シュコドラの家庭内の会話から、前章であげた統語上の特徴が見られる箇所を抜き出して並べると次のようになる。

①二次的不定詞

北部方言に見られるとされる「me+分詞」の表現は37例あった。

(1) Ma mirë me lajmruë 【父】

more good inform/tell-part. 「(息子から) 連絡があつてよかった」

(2) s'dëgjoj me ardhë 【母】

not hear-aor.sg.3 come-part. 「(あなたが) 来るって聞いてなかったのよ」

(3) Jepu njëçik me hangër 【母】

give-imp.sg.2+pl.3.dat. a piece eat-part. 「(お客に) 食べものをあげて」

(4) Prej poltronit ka kërcy n'penxhere aty për me dalë jashtë 【母】

from chair spring-perf.sg.3 into window there go out-part. outsides

「(鳥が) 椅子から飛び上がって窓の外に出たの」

(5) Mos shko me hangër ato që s' duhet me hangër 【長男】

not go-imp.sg.2 eat-part. those that not must eat-part.

「(もうあまり) 食べないで、食べない方がいいよ」

- (6) Kështu duhet me fol se nesër del ajo puna, 【長女】
therefore must tell-part. that tomorrow go out-sg.3 that work-nom.
「だから明日は仕事終わりのはずよ」

以上のように、家族がみな数回ずつ使用しており、偏りは見られない。例(4)では *me* が用いられているが、*për të dalë jashtë* と混じった表現である。また(6)は助動詞「*duhet* ~ねばならない、~のはずだ」と共に用いられている。

一方、標準語で一般的な「*për të* + 分詞」を用いた表現は 2 例しかなかった。

- (7) Kur t'jetë koha për të hangër e pi 【長男】⁸
when be-subj.sg.3 time-nom. eat-part. and drink-?part.
「食事の時間はいつかな」(lit. 食べて飲むための時間はいつか)

- (8) Per t'pirë njëherë, pi baftë mirë 【長男】
drink-part. now drink-imp.sg.2 make-opt.sg.3 well
「おいしく飲んでくれ」(lit. 飲むために、よろしくあらんことを)

2 例とも 20 代の長男の発話であり、両親や祖母の発話にこのような例はまったくない。また彼は例(5)のように「*me* + 分詞」の表現も同時に用いており、このような例も長男だけである。同じ「食べる」でも母は例文(3)のように「*me* + 分詞」しか用いていない。

②単純未来

北部方言に見られるとされる「*kam me* + 分詞」の表現は 1 例だけあった。

- (9) S'kemi..... natën me fjetë 【母】
not have-pl.1 at night sleep-part. 「(暑くて) あまり…夜は眠れないわ」

ただかなりくだけた発話で(間に言いよどみと“*natën*”が挟まっている)、本当にこの統語構造をとっているのかどうか少々疑問が残る。

一方、標準語で一般的な「*do të* + 接続法」を用いた表現は 3 例あった。いずれも父親や子それぞれの発話に見られる。

- (10) Prit tash, do të rijmë 【長女】
wait-imp.sg.2 now will stay-subj.pl.1 「待って、ここにいましょうよ」
(11) do [të] pushojmë pak 【父】
will rest-subj.pl.1 a little 「ちょっと一休みしよう」

興味深いのは、上にあげたどちらでもない「*do me* + 分詞」の形が 3 例見られることで

ある。

- (12) ti don me më ba me qeshë 【長男】
you want-sg.2 me make-part. with laughter
「あんた僕を笑わせようっていうんだろ」(lit.私を笑いでとらえるつもりだ)
- (13) ma ka marrë mendja që don me ardhë 【母】
me+it take-perf.sg.3 thought that want-sg.2 come-part.
「(あなたが) 来るっていうのを思い出したのよ」
- (14) A don me hangër 【長女】
(interrogative) want-sg.2 eat-part. 「(あなた) 食べるの？」

これは、標準語にも固定した言い回しで見られる⁹もので、このテキストから見る限りでは、北部方言でも（使用頻度は判然としないが）世代に関係なく用いられていることが分かる。

③ ジェルンド

北部方言に見られるとされる「tue / tu / tuj + 分詞」の表現が7例あったのみで、標準語の「duke + 分詞」を用いた表現はまったく見られなかった¹⁰。北部方言のジェルンドは家族のすべての構成員によってまんべんなく使用されていると思われる。

- (15) Isha tuj prit njitash makinën unë 【父】
be-impf.sg.1 wait-part. now car-sg.acc. I
「今、車を待ってたんだ」
- (16) ishte knaq tuj parë këto njikshtu mbledhë 【長男】
be-impf.sg.3 enough see-part. those here meeting
「(家族みんな) そろって会えてよかった」

2. 標準語話者を交えたテキスト

次に、ティラナの標準語話者によるインタビューに家族が答えているやりとりから1.と同様に例を数え上げた。主に父親と祖母の発話が占めており、1. と比べて例文の総数は少ないが、それでも1. との違いは顕著である。

① 二次的不定詞

北部方言に見られるとされる「me + 分詞」の表現は42例あった。ほとんどが1. の①であげたものと似たようなものなので、ここでは少し違う構文をあげておく。

- (17) Ç'ka me thënë 【祖母】
anything tell-part. 「何か言うことがあったかい」

(18) sepse ke frikë me folë 【父】

because have-sg.2 worry speak-part. 「(おまえは)言うのが怖いからだろう」

一方、標準語で一般的な「për të+分詞」を用いた表現は1例もなかった。この点は、発話状況が変わってもほとんど影響を受けていない。

ただし、「për+me+分詞」の形は1例だけあった。

(20) llogari për me respektu njerzit e mij 【父】

balance respect-part. people my

「私の家族 (lit.私の人々) を敬う習わし」

②単純未来

北部方言に見られるとされる「kam me+分詞」の表現は1例だけあった。

(21) kam unë me marrë jo gjak, por me marrë me ba një vrasje... 【父】

have-sg.1 I take-part. no blood but take-part. make-part. a murder

「私は復讐をする (lit.血をあがなう) のでなく、するのは、人殺しをすることなのです」

一方、標準語で一般的な「do të+接続法」を用いた表現が7例あった。いずれも父親や子それぞれの発話に見られる。上の「kam me+分詞」が1例しかないことを考えると、1. の場合よりも割合が増えている。

(22) ...do të lindin diçka të mirë, 【父】

will be born-subj.pl.3 something good

「何かしらよいものが生まれてくるでしょう」

また1. で3例あげた「do me+分詞」の形は、domethënë「すなわち」という決まり文句の形で3例見られる¹¹。

③ジェルンド

北部方言に見られるとされる「tue / tu / tuj+分詞」の表現は1例のみに留まった。

(23) Natyrisht tu pa botën.

naturally see-part. the world

「もちろん世間を見ればね」

これに対して標準語の「duke+分詞」を用いた表現が5例あらわれている。

(24) sepse lirinë nuk janë duke e fituar ata

because freedom-acc. not be-pl.3 it win-part. those

që ndjekun rregullën e një kolektivi të mirë 【父】

that follow-pl.3 rule+acc. of a group good

「なぜなら自由をかちとるのは、よき集団の規則を守る人たちだからです」

これはすべて父親の発話であるが、同じ人物が家族との会話では「tue / tu / tuj+分詞」のみを用いており、他の家族も「duke+分詞」を使っていなかったことを考えると、この変化は極端である。しかも例(23)は、会話の間に何気なく挟まれたごく短い一言で、もし長い表現になっていたら「duke pa botën」に変わっていたとしても不自然ではない。

3. 考察と結論

今日のアルバニア語は南部方言を基本に作られており (Byron 1976)、北部方言であるゲグ方言は、より標準語から離れた位置にあると言える。そのため標準語話者、またはアルバニア語を解する外国人との会話では、ゲグ話者がある程度まで標準語を意識して発話することになり、その結果、標準語の音韻、形態、統語を意識しながらも依然として北部方言の特徴を保っている「正規化されたゲグ」¹²とでも言うべき表現が見られることが指摘されている。

その点からすると、まず1. であげた例にはいずれも比較的方言がよく出ており、一方で2. の例では「正規化されたゲグ」と思われる傾向がより多くあらわれていると考えてよいのではないだろうか。2. で父親はジェルンドを「tue / tu / tuj+分詞」から完全に「duke+分詞」に切り替えており、質問者（首都出身で、若く、教養が高い人物）に対して明らかに「あらたまった口調」で話している。もっとも、2. で扱ったテキストが完全に「標準語」に置き換えられていないのは、個々の語彙や変化語尾が依然として北部独特のものであることから明らかである¹³。(別表)

ただ、1. であげた例の中でも明らかに北部方言における統語構造のみで占められているのは、③のジェルンドのみであり、①や②では若干「標準語」的な表現が混用されているようにも見える。特に①で興味深いのは、比較的高齢でほとんどシュコドラから出たことのない両親が「me+分詞」の二次的不定詞句のみを使っているのに対し、若い世代に属する長男が「me+分詞」と「për të+分詞」を併用しているように見えることである。この長男に他のアルバニア語圏での生活経験もある（彼はイタリア南部のアルバニア系住民の居住区に留学している）ことが影響している可能性も大いにあるが、仮にそうでないとしても、ティラナとシュコドラとの距離的な近さ¹⁴から考えて、継続的にシュコドラ在住でもほぼ同じ結果になっていたのではないかと考えられる。もっともこの点については、シュコドラに残っている長女の発話テキストが少ないため、想像の域を出ない。

なお、今回は異なる会話条件のテキストを用いざるを得なかったが、今後はできるだけ同じような条件で標準語話者の干渉が起こる場合と起こらない場合を用意し、調べてみる

ば、本論文で明らかにした傾向を確認することができるのではないかと考えられる。

(表)

1. における例文の分布

me+分詞	për të+分詞	kam me+分詞	do të+接続法	tu+分詞	duke+分詞
37	2	1	3	7	0

2. における例文の分布

me+分詞	për të+分詞	kam me+分詞	do të+接続法	tu+分詞	duke+分詞
42	0	1	7	1	5

(以上とは別に『do+me+分詞』の例が1. と2. でそれぞれ3例ずつ存在する)

参考文献

- Byron, Janet L.; *Selection among alternates in language standarization: The case of Albanian*. (Mouton, The Hague 1976)
- Buchholz, Oda / Fiedler, Wilfried; *Albanische Grammatik*. (Verlag Enzyklopädie, Leipzig 1987)
- Demiraj, Shaban; *Gramatikë historike e gjuhës shqipe*. (8 Nëntori, Tiranë 1986)
- Demiraj, Shaban; *Fonologjia historike e gjuhës shqipe*. (Toena, Tiranë 1996)
- Gjinari, Jorgji; *Dialektet e gjuhës shqipe*. (Akademia e shkencave e RPSSH, Tiranë 1989)
- Luka, David; *Studime gjuhësore 1*. (Instituti i studimeve shqiptare "Gjergj Fishta", Shkodër 1999a)
- Luka, David; *Studime gjuhësore 5*. (Instituti i studimeve shqiptare "Gjergj Fishta", Shkodër 1999b)
- Për pastërtinë e gjuhës shqipe. Fjalor*. (Akademia e shkencave e RSH, Tiranë 1998)
- Shkurtaç, Gjovalin; *Ta duam dhe ta ruajmë gjuhën tonë të bukur*. (Libri Unversitar, Tiranë 1998)

- ¹ ゲグ方言の特徴として、本文で扱うものの他に、以下の事柄がよく知られている (Buchholz / Fiedler 1987 Demiraj 1996 Luka 1999b 他) ;

鼻音の存在 (標準語にはない)

bân「する、行う」(標準語 bën) kângë「歌」(標準語 këngë)

長母音の存在 (標準語には長母音／短母音の区別がない)

kā「持っている」(標準語 ka) gūr「石」(標準語 gur)

母音間 n 音の維持 (標準語ではロタシズム rhotacism が起こり /n/ > /r/ となる)

hyni「入った (pl.2)」(標準語 hyri) Shqipni「アルバニア」(標準語 Shqipëri)

mb-, nd- > m-, n-

maroj「終える」(<標準語 mbaroj) ner (<標準語 nder)

二重母音の変化・消失

mbill「蒔く」(<標準語 mbjell) mue, mu「私を、私に」(<標準語 mua)

分詞語尾がより古形に近い

shkoj「行く」>shkuem (古形 shkuom 標準語 shkuar)

- ² 短縮形でなく人称変化する場合は主語の意志をあらわす、と言われるが実際には必ずしも厳密に区別されていない。

Dua të shkoj aty.

want.sg.1 go-subj.sg.1 there

「私はそこへ行くつもりだ」

Do të shkoj aty.

will go-subj.sg.1 there

「私はそこへいく (ことになるだろう)」

? 「私はそこへ行くつもりだ」

- ³ こうした表現が言語の中心部 (標準語) になく、南北の周辺地域に共通して存在するという事は、これが比較的古いものである可能性を示唆している。そして、実際その通りである (Demiraj 1986)。

- ⁴ 首都ティラナは一応標準語が用いられる地域だが、実際の話し言葉では北部方言の要素が見られることも少なくない (井浦の観察とティラナ市民からの聞き取りによる情報)。しかもそれは北部からの移住者だけでなく、ティラナ出身者の表現の中にも見られる点で興味深い。これは本来ティラナが、ギリシアやコソヴォを包含するアルバニア語圏全体ではむしろ北寄りであることと関係しているが、本論文では取り上げない。

- ⁵ Shkodra は定形語尾を伴って形態上 definite となった形。不定形は Shkodër「シュコダル」で、引用にはどちらを用いても問題ないが、本論文では Shkodra「シュコドラ」で統一する。

- ⁶ このアルバニア語テキストはテレビのドキュメンタリー番組のために撮影された各々2時間程度の映像からの書き起こしであり、Shkodra 市出身・在住の Lec Gjoni (60 歳代) と Meri Gjoni (50 歳代) の夫婦、その長男 Gentian と長女 Agë (ともに 20 歳代)、および Lec の母 Tina (80 歳代) の会話から主に成っている (ただし実際には祖母はほとんどしゃべっていない)。長男は約 2 年間イタリアに住んでおり、夏休暇で帰省した際の食卓でのやりとりが大部分を占めている。

直接の質問者はティラナ出身・在住の Anila Berberi (20 歳代) で、テキストの書き起こしも彼女が行っている。文の切れ目やコンマの位置などはこの書き起こしに従った。ただ本人の判断で標準語に書き改めていると思われる箇所や明らかな誤記が少々あり、井浦

の判断で復元するか、またはあらかじめ考察から除外した。テキスト及び、収録音声・映像素材を提供して下さったNHK教養番組制作部の鶴谷邦顕氏らに感謝する。

7 もちろん外国テレビ局の取材という状況なので、厳密に自然な状態ではない。ただ、家族は取材者側の言語（日本語）をまったく解さず、またこの時は取材者側にも家族の母語（アルバニア語）を直接に解する人がいなかった。つまり、取材者に会話の内容を聞かれているのではないかと意識することは最初からあり得なかった。また取材者側への話しかけも、唯一外国語（イタリア語）が出来る長男（20歳代）が代行しているので、両親や祖母へのアルバニア語そのものにはほとんど干渉がないと見てよいだろう。

8 しかもこの表現は厳密には「正しい」文ではない。「食べるための」が *të hangër* であるなら *pi* も標準語の分詞形 *të pirë* でなければならない。この点、発話に方言と標準語との混同が見られる。

9 例； *domethënë* 「いわば」 < *do me + them* 「言う」の分詞形

10 ただし 1 例だけ次のようなものがあつた。 *dun* は *duke* か、あるいは *do* のヴァリエーションであると考えられるが、現時点では確認できないので考察から除外している。

S' po *dun me na komentu*. 【長女】

not now ? us comment-part.

「別に（私たちに）言うことないのね」

11 註 9 参照。

12 この呼び方は、ミュンヘン大学のアルバニア人講師 *Ardian Klosi* 氏による “*gegërishtja e normuar*” または “*genormtes Gegisch*” に倣っている。

13 これについて上述の *Klosi* 氏によると、例えばドイツやスイスで発行されている在外アルバニア人向けの新聞雑誌は原則的に標準語による記述であるはずなのに、実際の執筆陣がしばしばコソヴォ出身であるため、本人らもまったく気付かずに北部でしか通用しない語彙や表現を「標準語のつもり」で書いている例が多々見られるという。

14 首都ティラナからシュコドラまでは 120km、最も一般的な交通手段の乗合タクシーで 6～7 時間の距離であり、日常的に往来は盛んと言っていい。